

紀要

縄文時代～古墳時代前期の集団規模の推移

－琵琶湖周辺地域における先史社会の展開過程に関する覚書（1）－

.....瀬口 眞司（1）

近江地域における古代東北系土器の新例

－守山市・横江遺跡・大門遺跡出土事例を中心にして－辻川 哲朗（13）

古代道路名称考

－阿須波道の名称由来について内田 保之（24）

塩津港遺跡出土の船形模型と琵琶湖の伝統的木造船

.....横田 洋三（35）

比良山系の山寺（3）

－高島市太山寺遺跡について－小林 裕季（40）

滋賀県とその周辺における石臼の産地に関する一考察

－彦根市妙楽寺遺跡出土の石臼を中心として－加藤 達夫（44）

28

縄文時代～古墳時代前期の集団規模の推移

—琵琶湖周辺地域における先史社会の展開過程に関する覚書（1）—

瀬 口 眞 司

1. 序論

(1) テーマと論点

筆者の研究テーマの1つは、先史社会の展開過程を探り、時期的推移や地域的差異からその文化的背景を論じるところにある。文化を「現実に向き合う仕組み」として定義し、筆者のテーマを改めて言い直すならば、歴史とその多様性の観察から、先史の人々が何を選択し、どのように生き抜いてきたかを論じること、ということになる。

そのための基礎作業として、各地域の展開過程を分析し、相対化する作業が必要となる。その一端として、本稿では琵琶湖周辺地域の縄文時代早期～古墳時代前期を対象とする。派生する論点は多岐にわたるが、本稿では2つの論点を設け、第1の論点として「地域社会の規模」の推移を問い、第2点として「居住集団の規模」の推移を問う。

(2) 現状の課題

琵琶湖周辺地域における当該時期の社会の変化については、これまでも様々な議論が重ねられてきた。縄文時代に関しては、筆者と小島孝修が悉皆的な集成成果に基づきながら、遺跡数や遺跡分布の推移を整理し（瀬口1999～2001、小島1999・2000・2002）、筆者は数量的なデータに基づきながら定住集落の成立とその展開過程を論じ、関西地方全域を含めた社会論への展開を試みてきた（瀬口2009）。

弥生時代から古墳時代前期についても精緻な観察が進められてきた。煩雑な記載を避けるため、詳細の一部は稿末の付表1にまとめるが、重要な議論の起点を設けたのは杉本源造だろう。氏は遺跡群の動態に着目し、遺跡分布、変遷、高地性集落や玉作り・銅鐸等のあり方、前期古墳との関連を論じ、近江の弥生社会論へ一石を投じた（杉本1989）。またこれらの視点を発展させる形で、横井川博之・伴野幸一・植田文雄・松室孝樹らによって、近江盆地内の地域ごとの様相が改めて整理され、土器から見た変化、農耕の導入過程、環濠集落・高地性集落の出現と展開、埋葬遺構に見る格差等から社会的変化を読み取る作業が重ねられた（横井川2000、伴野2000、植田2000、松室2000ほか）。

これらの包括的な検討の他に論点を絞ったアプローチも試みられている。例えば岩崎直也は、掘立柱建物に注目し、それをもつ集落の分布、掘立柱建物の平面型式とその時期的推移、その機能、建物構成（竪穴建物を含めた建物の種類と規模の組み合わせ）の時期的推移等を整理し、集落類型の設定とその考察から、社会論への展開の基礎を築いた（岩崎1991）。

また近藤広は、弥生時代中・後期の集落構造を問題とし、掘立柱建物を含めた建物構成と集落立地の関連、後期前半における集落の縮小と分散現象等を論じ、併せて大型建物や方形区画といった中心施設をもつ守山市下鈎遺跡・伊勢遺跡の様相を整理した（近藤2002）。その後も氏は、区画施設をもつ集落を対象に事例の整理やその性格を論じている（近藤2007）。なお、岩崎や近藤が着目した掘立柱建物の使用状況については、大木要が立地と建物構成の関係を改めて精力的かつ丁寧に整理し、再論している（大木2007）。

以上の多くは、現象の質的な変化を丁寧に追求したもので、重要な成果を含んでいる。一方で、数量的なデータを用いた推移の把握は不足しているようにも見える。悉皆的な集成に基づく数量的な分析は、現象の変化をより客観的な形で可視化できるという特性をもつ。縄文時代に関しては、その特性を活かして一定の成果を蓄積しつつあるが（瀬口2009ほか）、弥生時代以降に関しては、岩崎や大木の研究で成果が生まれてはいるものの、力を尽くすべき余地はまだ大きい。そこで本稿では、現状の課題として数量的な分析の基礎固めを挙げたい。そして、従来の結果と数量的な分析に基づく検討結果を建設的に照らし合い、新たな問いと生産的な議論を蓄積していく基盤を設けてみたい。

(3) 分析の対象

本稿の対象地域は琵琶湖周辺地域（滋賀県域）である。対象時期は縄文時代早期から古墳時代前期までとする。対象資料は、当該時期の遺構が検出された遺跡、ならびに建物（竪穴建物・掘立柱建物等）である。

分析項目は以下の2つである。①は遺跡数・居住遺跡数・建物数・建物面積合計値、②は各居住遺跡における建物数・建物面積合計値・住居面積の度数分布で、それらを集計・算出して時期的推移を整理する。このうち①は「地域社会の規模」の推移をある程度示唆するものとして位置付け、②に関するデータは「居住集団の規模」をある程度示唆するものとして位置付ける⁽¹⁾。

なお、ここで言う遺跡とは各種の遺構が出土した埋蔵文化財包蔵地を指し、その中で建物が検出されたものを居住遺跡と呼ぶことにする。

(4) 時期区分とその補正

時期的推移を整理するために用いる時期区分は表1のとおりである。縄文時代は早期前葉から晩期後半までの1期～14期に細分する。弥生時代はⅠ期～Ⅴ期に区分し、古墳時代前期はⅥ期とする⁽²⁾。

なお14期（縄文時代晩期後半）とⅠ期（弥生時代前期）の資料は混在して出土することが多く、弁別しにくい。そこで、集計・分析に際しては同一時期として一括した。同様の理由から、弥生時代中期のⅡ期（前葉）とⅢ期（中葉）も同一時期として一括し、作業を進める。

時期的推移の分析では、炭素14年代測定法に基づく較正年代を援用する。筆者の先行研究も含め、これまでの同様な研究では、土器編年に基づく時期区分ごとの生の資料数を用いて時期的推移が分析されてきた（瀬口2009ほか）。これらの研究は、各時期区分の長さが等しい場合に始めてより厳密な意味が生じるけれど、土器編年に基づくそれぞれの時期区分が等しいという保証はどこにもなかった。これは、現在までの多くの関連研究がもつ限界の1つとして指摘できるだろう。本来は等しい時間単位のデータに置換し、時期区分の長短によるバイアスを排する必要がある。

近年、放射性炭素年代の研究が進み、土器の付着炭化物から、炭素年代を測定し、更にその年代を歴年代に較正する作業が進展した。その結果、土器編年区分のおおよその長さがより正確に把握できる状況が整いつつあり、従来の研究を打破する流れが生まれつつある（小林謙2004ほか）。

そこで本報告では、これらの成果を援用し、各時期の数値を30年単位の数値に置換して、時期区分の長短によるバイアスを可能な限り減じながら分析を進めることにする。

この分析に必要な較正された年代観は、表1の右欄のとおりである。これらのデータのうち、縄文時代晩期以降の年代については『国立歴史民俗博物館研究報告』第149集に準じ（藤尾編2009）、それ以前の縄文時代の年代については小林謙一氏の業績（小林謙2008）を基本的に援用する。なお、小林氏の業績は関東地方の土器編年を対象にしたもので、関西地方の土器編年の較正年代をそのまま示すものではない。従って、関東地方と関西地方の土器編年の併行関係を整理した上で援用する必要がある。この点については、小林達雄編の『総覧縄文土器』の編年表をもとに整理した（小林達2008）。

（5）集成データの性格と限界

集成作業は2つの先行研究をベースに進めた。第1は筆者と小島孝修がかつて行った集成作業、ならびに筆者の先行研究である（瀬口1998・1999・2000・2002・2009、小島1998・1999・2001）。これらは当該地域の縄文時代のデータに関するものである。基本的に本稿の論点に対応しているので、そのまま援用した。

第2は、国立歴史民俗博物館の依頼により伊庭功が尽力した滋賀地域の弥生遺跡集成作業である。これは弥生時代～古墳時代前期の資料を対象にしたもので、当該期の遺物が出土した遺構がリスト化されている。今回は、これをベースとして活用しながら各発掘調査報告書の情報を改めて一から参照し、データ化した⁽³⁾。

なお、上記の縄文時代に関するデータは2008年までの

発掘調査事例をもとにしたものである。また弥生時代前期～古墳時代前期に関するデータは2006年度までに刊行された発掘調査報告書を対象としたものである。その後、これまでに6～8年の歳月が経過しているので、以降の成果を取り込めていない点は本稿の限界の1つだが、成果に大きな影響を与えるものではないと考え、そのまま分析を進める。他の論点を含めた包括的な検討を近い将来に予定しているので、この限界については、その機会に対応したい。

2. 本論1——地域人口の規模の推移

（1）集成結果の概要と分析の指標

本章では第1の論点である「地域社会の規模」の推移について論じる。この論点は4つの指標——遺跡数・居住遺跡数・建物数・建物面積合計値から検討する。対象となる遺跡数はのべ932遺跡で、居住遺跡数はのべ220遺跡⁽⁴⁾、建物数は合計1409棟を数える。

4つの指標のうち、最もオーソドックスなデータは遺跡数だろう。これまでも小山修三の研究をはじめとする多くの研究実績がある（小山1984ほか）。ただし、この指標には注意すべき点が少なくとも2つあるだろう。

第1の注意点は、遺跡の大小がくみ取れていない点である。例えば3ヶ所の遺跡があるとする。しかし、それぞれの居住人数が、50人・30人・20人の場合と、100人・60人・40人の場合では、地域社会の規模は異なる。このように遺跡によって大小があり、それぞれ居住人数が相違した場合は多いはずなので、この指標だけで議論することを本稿では避ける。

第2の注意点は、遺跡そのものも意味にそもそも相違があり得る点である。今回は何らかの遺構を検出した遺跡をカウントしているが、中には居住に関連しない遺跡も含んでいる可能性がある。従って、本章の論点を問うていくには、この点も何らかの方法で補う必要がある。

以上を踏まえ、本稿では以下の3つの指標を加えて問う。

- ・居住遺跡数——居住遺跡にも大小があるため、第1の注意点は補えないが、第2の注意点を補う。
- ・建物数——建物にも大小があるため、第1の注意点は補えないが、第2の注意点を補う。
- ・建物面積——1人当たりの専有面積が時期的に大きく変わらないという前提に立てば、第2だけでなく第1の注意点も補う。ただし、この前提は絶対的ではないため、この指標だけを根拠にすることはできない。

それぞれの指標にも上記のような限界があるため、作業の成果は傾向の抽出という点に留まるが、これらを多面的に検討することで、より蓋然性の高い理解を目指す。

集計結果は表2のとおりで、グラフとして可視化した結果は図1～3のとおりである。ただし、これらは較正年代で補正しておらず、時期区分の長短によるバイアスを減じていない。従って、参考資料と扱うが、分析はしない。

表 1 時期区分

時期 コード	時期		土器型式		較正年代 (calBP)		期間
			関西	関東			
1	縄文早期	前葉	ネガティブ押型文土器群	撫糸文系土器群 (井草Ⅰ式～稲荷台式)	11,500	～ 10,450	1,050
2		中葉	ポジティブ押型文土器群	沈線文系土器群 (田戸下層式～野島式)	10,450	～ 8,500	1,950
3		後葉	条痕文系土器群	条痕文系土器群 (鵜ヶ島台式～下吉井式)	8,500	～ 7,000	1,500
4	縄文前期	前葉	羽島下層Ⅰ式・清水ノ上Ⅰ式	花積下層～関山式	7,000	～ 6,450	550
5		中葉	羽島下層Ⅱ式～北白川下層Ⅱa式	黒浜式	6,450	～ 6,050	400
6		後葉	北白川下層Ⅱb式～大蔵山式	諸磯a式～十三菩提式	6,050	～ 5,550	500
7	縄文中期	前葉	船元Ⅰ式	五領ヶ台式～ 勝坂Ⅰ式・阿玉台Ⅱ式	5,550	～ 5,200	350
8		中葉	船元Ⅱ～Ⅳ式	勝坂Ⅱ式・阿玉台Ⅲ式～ 勝坂Ⅲ式・阿玉台Ⅳ式	5,200	～ 4,900	300
9		後葉	里木Ⅱ式～北白川C式	加曽利EⅠ～Ⅳ式	4,900	～ 4,420	480
10	縄文後期	前葉	中津式～北白川上層Ⅱ期	称名寺式～堀之内2式	4,420	～ 3,820	600
11		中葉	北白川上層Ⅲ期～元住古山Ⅰ式	加曽利B1式～加曽利B3式	3,820	～ 3,470	350
12		後葉	元住古山Ⅱ式～宮滝式	曾谷式～安行2式	3,470	～ 3,220	250
13	縄文晩期	前半	滋賀里Ⅰ～Ⅲa式	大洞B1式～B2式	3,220	～ 3,050	170
14		後半	篠原式～長原式 Ⅰ様式	大洞B-C式～大洞A'式	3,050	～ 2,300	750
I	弥生前期	前葉	Ⅱ様式		2,300	～ 2,270	30
II		中葉	Ⅲ様式		2,270	～ 2,150	120
III		後葉	Ⅳ様式		2,150	～ 1,980	170
IV	弥生後期		V様式		1,980	～ 1,750	230
V					1,750	～ 1,560	190
VI	古墳前期		庄内式・布留式				

表 2 遺跡数・建物数・建物面積合計値の総括表

時期			遺跡数	居住 遺跡数	建物数			建物面積合計		
					計	竪穴	掘立	計	竪穴	掘立
縄文早期	前葉	1	7	0	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
	中葉	2	17	0	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
	後葉	3	19	1	1.00	1.00	0.00	13.42	13.42	0.00
縄文前期	前葉	4	12	0	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
	中葉	5	18	0	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
	後葉	6	16	2	8.00	8.00	0.00	77.97	77.97	0.00
縄文中期	前葉	7	18	0	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
	中葉	8	21	0	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
	後葉	9	49	7	13.00	13.00	0.00	164.71	164.71	0.00
縄文後期	前葉	10	54	6	44.00	8.00	36.00	585.40	152.69	432.71
	中葉	11	27	2	6.00	1.00	5.00	95.06	19.63	75.43
	後葉	12	29	4	12.00	12.00	0.00	267.80	267.80	0.00
縄文晩期	前半	13	27	0	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
縄文晩期 弥生前期	後半 Ⅰ	14	120	9	18.00	18.00	0.00	366.89	366.89	0.00
弥生中期	前半	Ⅱ・Ⅲ	89	15	22.82	10.82	12.00	205.94	152.12	53.81
	後半	Ⅳ	83	24	216.66	161.66	55.00	3847.81	3234.35	613.47
弥生後期		V	141	56	245.50	207.50	35.00	4974.39	4265.46	708.93
古墳前期		Ⅵ	185	94	822.00	723.00	96.00	12183.91	11037.02	1146.89
計			932	220	1408.98	1163.98	239.00	22783.31	19752.07	3031.24

表 3 遺跡数・建物数・建物面積合計値の総括表（較正年代による補正：30年あたりの数値）

時期			遺跡数	居住 遺跡数	建物数			建物面積合計			年代 (calBP)	期間
					計	竪穴	掘立	計	竪穴	掘立		
縄文早期	前葉	1	0.20	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	11,500 ～ 10,450	1,050
	中葉	2	0.26	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	10,450 ～ 8,500	1,950
	後葉	3	0.38	0.02	0.02	0.02	0.00	0.27	0.27	0.00	8,500 ～ 7,000	1,500
縄文前期	前葉	4	0.65	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	7,000 ～ 6,450	550
	中葉	5	1.35	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	6,450 ～ 6,050	400
	後葉	6	0.96	0.12	0.48	0.48	0.00	4.68	4.68	0.00	6,050 ～ 5,550	500
縄文中期	前葉	7	1.54	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	5,550 ～ 5,200	350
	中葉	8	2.10	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	5,200 ～ 4,900	300
	後葉	9	3.06	0.44	0.81	0.81	0.00	10.29	10.29	0.00	4,900 ～ 4,420	480
縄文後期	前葉	10	2.70	0.30	2.20	0.40	1.80	29.27	7.63	21.64	4,420 ～ 3,820	600
	中葉	11	2.31	0.17	0.51	0.09	0.43	8.15	1.68	6.47	3,820 ～ 3,470	350
	後葉	12	3.48	0.48	1.44	1.44	0.00	32.14	32.14	0.00	3,470 ～ 3,220	250
縄文晩期	前半	13	4.76	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	3,220 ～ 3,050	170
縄文晩期 弥生前期	後半 Ⅰ	14	4.80	0.36	0.72	0.72	0.00	14.68	14.68	0.00	3,050 ～ 2,300	750
弥生中期	前半	Ⅱ・Ⅲ	17.80	3.00	4.56	2.16	2.40	41.19	30.42	10.76	2,300 ～ 2,150	150
	後半	Ⅳ	14.65	4.24	38.23	28.53	9.71	679.03	570.77	108.26	2,150 ～ 1,980	170
弥生後期		V	18.39	7.30	32.02	27.07	4.57	648.83	556.36	92.47	1,980 ～ 1,750	230
古墳前期		Ⅵ	29.21	14.84	129.79	114.16	15.16	1923.78	1742.69	181.09	1,750 ～ 1,560	190
			108.60	31.27	210.78	175.88	34.07	3392.31	2971.61	420.69		

分析の対象としては表3を用いる。これは、表2をもとに30年当たりの数値に補正したものである。これを可視化した結果が図4～6に示すグラフである。以下、この3つのグラフから、「地域社会の規模」の推移を検討する基盤を構築する。

（2）遺跡数と居住遺跡数の推移（図4）

4つの指標のうち、まず遺跡数と居住遺跡数を検討したい。図4は上下2つの曲線で較正されている。上位の曲線は遺跡数の推移を示したもので、居住遺跡数と非居住遺跡数の合算値の推移である。下位の曲線は、居住遺跡数だけの推移を示している。

補正前の図1と比較すると、上下いずれも、より滑らかに変化していることに気付くことができる。時期区分の長短というバイアスを排すると、琵琶湖周辺地域の遺跡数・居住遺跡数は、一部の時期を除いて比較的滑らかな変化曲線を描きながら増加したことが読み取れる。

それぞれの推移の詳細は以下のとおりである。

- ・遺跡数の推移——基本的に図1よりも滑らかな曲線を描くとはいえ、Ⅱ期・Ⅲ期（弥生時代中期前葉・中葉）を頂点とする大きな増減が見て取れる。この時期に遺跡数は顕著に増加するが、Ⅳ期にやや減少し、Ⅴ期に再び増加傾向へ転じたことが窺える。
- ・居住遺跡数の推移——Ⅱ期・Ⅲ期を画期として増加傾向へ転じ、以降滑らかな変化曲線を描きながら増加することが見て取れる。

以上の観察を踏まえたとき、整理すべきポイントが2つ見出せる。第1のポイントは、図1と図4における増加期の現れ方の相違である。補正前の図1における顕著な増加期は14期・1期（縄文時代晩期後半・弥生時代前期）にある。しかし、図4ではその増加期はもう1段階遅い時期に現れている。時期区分の長短というバイアスを排するならば、本来の画期はⅡ期・Ⅲ期だったということが見出せたことになる。

第2のポイントは、図4の2つの曲線が描く軌跡の相違である。これについては次節で扱う図5・6とも関連づけて後述したい。

（3）建物数と建物面積合計値の推移（図5・6）

ここでは建物数と建物面積合計値の推移を問う。それぞれの推移は図5と図6に示したとおりである。結果として、2つのグラフは同様な傾向を示しており、ここではその差異を強調する必要はない。数で見ても面積合計値で見ても同様な推移が確認できる。ここで見出せる画期は以下の2つである。

- ・第1の画期——Ⅳ期（弥生時代中期後葉）。この時期に建物数と面積合計値はいずれも爆発的に増加する。
- ・第2の画期——Ⅵ期（古墳時代前期）。Ⅳ期からⅤ期にかけて水平的に推移した後、この時期に再び爆発的に増加する。

（4）4つの分析結果の整理

以上4つの指標を用いて、地域人口の推移に関する基礎資料を分析した。その整理をここで試みたい。整理のポイントの1つは、図4における第1の画期と、図5・6における第1の画期の時期的なズレである。

図4では遺跡数や居住遺跡数の推移を示した。その第1の画期はⅡ期・Ⅲ期にあった。一方で、図5・6では建物の値の推移を示したが、その第1の画期はもう1段階遅いⅣ期にある。この差異からは2つの可能性が読み取れる。

第1の可能性は、掘立柱建物の見落としに起因する錯覚である。杉本源造らの分析に拠れば、Ⅱ・Ⅲ期の遺跡は低地に分布する傾向にある（杉本1989ほか）。また、岩崎直也・近藤広・大木要らに拠れば、低地の遺跡では掘立柱建物を使用する傾向にあると言う（岩崎1991、近藤2002、大木2007）。ただ、しばしば指摘されるように掘立柱建物は堅穴建物に比べて認識しにくい。従って、低地において遺跡数・居住遺跡数が増加したにも関わらず、建物の数と面積合計値を適正にカウントできておらず、図4が示す傾向と図5・6が示す傾向の間でズレがあるように錯覚している可能性がある。

第2は「地域社会の規模」に関する拡大過程の実態をより具体的に示している可能性である。図4と図5・6における画期のズレを素直に読み取るならば、琵琶湖周辺における「地域社会の規模」の拡大過程は、次の3段階を経て進行した可能性が考えられる。

- ・第1段階——Ⅱ期・Ⅲ期が相当する。この段階にまず居住地数が増加した。居住者数自体は変わらないか微増に留まるが、居住地が拡散した段階と位置付けられる。
- ・第2段階——Ⅳ期が相当する。前段階に拡散した個々の居住地内で居住者数が増加した結果、人口規模という意味での「地域社会の規模」が拡大した。
- ・第3段階——Ⅵ期が相当する。居住地数・居住地内の居住者数のいずれもが更に増加し、結果として「地域社会の規模」が更に拡大した。

以上、少なくとも2つの可能性があることを示した。どちらの蓋然性が高いのか。この点を更に論じていくには、岩崎直也がかつて試行したように報告書等を用いた掘立柱建物の再検出作業が必要だろう（岩崎1991）。また、その成果の蓋然性を異なる側面から問うために、例えば1棟当たりの遺物量の多寡の時期的推移等を検討していく必要があるかも知れない。いずれにしろ、多様な視点と分析方法から光を当て、確認を進めていく必要があるだろう。現状でその作業をする余力はないが、以降の課題としたい。

3. 本論2——居住集団の規模の推移

（1）集成結果の概要

本章の論点は「居住集団の規模」の推移である。この論

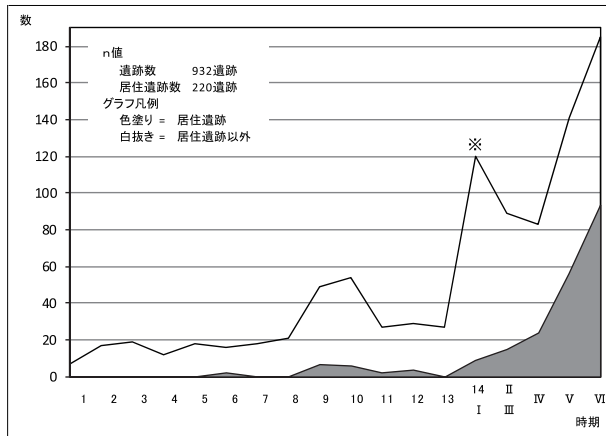


図1 遺跡数と居住遺跡数の推移 【補正前】

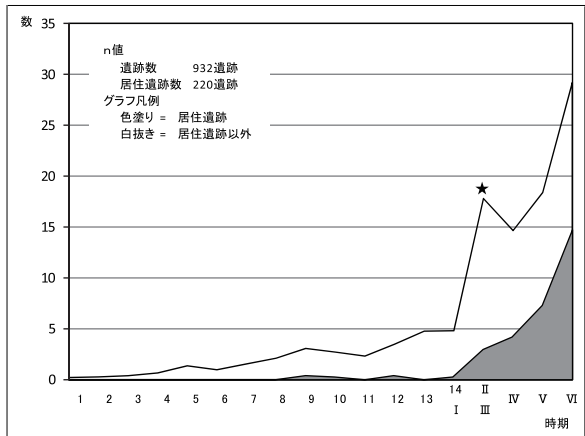


図4 遺跡数と居住遺跡数の推移 【補正後】

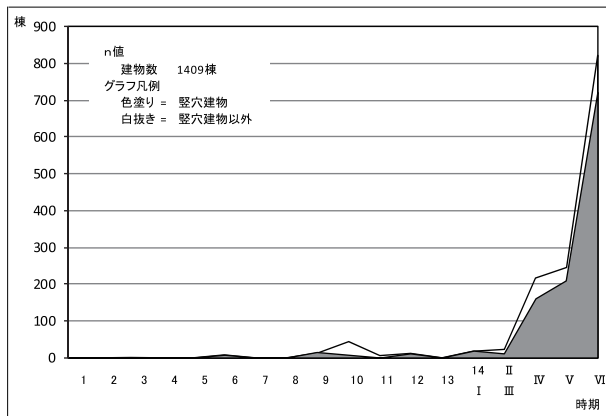


図2 建物数の推移 【補正前】

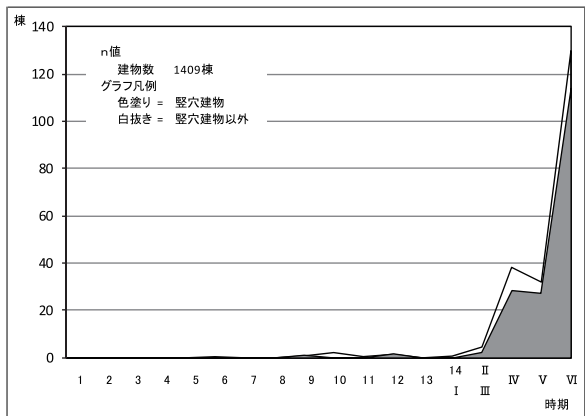


図5 建物数の推移 【補正後】

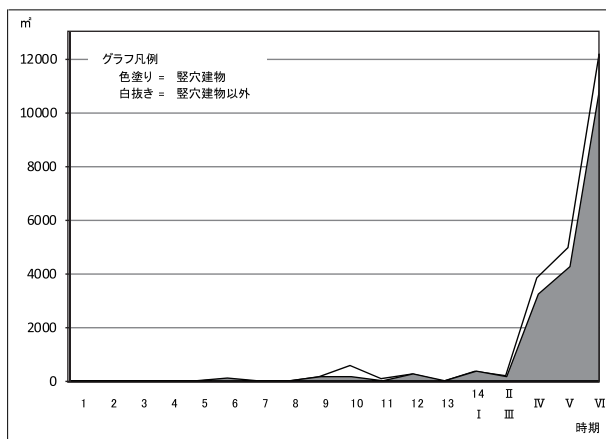


図3 建物面積合計値の推移 【補正前】

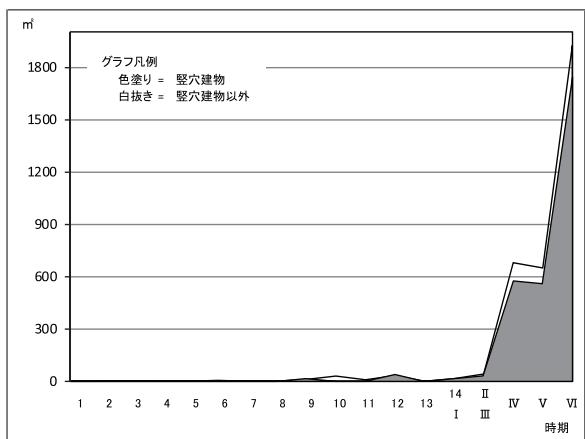


図6 建物面積合計値の推移 【補正後】

点は2つに細分して論じたい。その第1の細分論点は「居住遺跡の規模」の推移である。これについては、まず居住遺跡ごとに建物数や建物面積の合計値を算出し、ついで時期ごとの傾向とその推移から論じることにはしたい。

第2の細分論点は「最小居住単位の規模」の推移である。何をもって最小居住単位とするか。この点については多様な考え方があるはずだが、ここではまず、一つ屋根の下で暮らす集団をいわゆる世帯として捉え、これを「最小居住単位」と位置付けたい。そして、各建物の面積がその居住単位の規模をある程度示唆するものと位置付けた上で、その時代的な傾向と推移から論じることとする。

対象となる建物数は合計1409棟で、面積を算出できたものは916棟である。916棟の内訳は竪穴建物が727棟、それ以外の建物（掘立柱建物・平地式建物等）が189棟である。以下、まず第1の細分論点を論じた後、第2の細分論点を検討する。

（2）居住遺跡の規模の推移（図7～10）

第1の細分論点は図7～10を用いて論じる。各居住遺跡における建物数の推移を図7に示し、面積合計値の推移を図9に示した。図8・10は、それぞれのデータを30年当たりの数値に算出し直して可視化したものである。

建物の数と面積合計値の推移曲線は大きく相違しないので、ここでは建物数で代表させて観察を進めよう。また、前章では30年当たりの数値を用いて考えを深めたので、本章でもそれに倣い、図8を主たる対象として観察を進めたい。その結果は以下のとおりである。

- ・Ⅰ期（弥生時代前期）以前——縄文時代の居住遺跡は、どの時期もごく小さい規模のものに限られる。その規模は30年当たりに換算した場合1～2棟程度と見込まれる。以下、このクラスを仮に小規模型遺跡と呼びたい。この傾向はⅠ期まで続く。
- ・Ⅱ期・Ⅲ期（弥生時代中期前葉・中葉）——30年当たりに換算した場合、3棟程度の規模を持つ居住遺跡が顕在化した。小規模型遺跡に加え、その2倍程度の規模の居住遺跡（馬場遺跡等）が加わっており、第1の画期の萌芽が顕在化し始めた段階だと位置付けたい。
- ・Ⅳ期（弥生時代中期後葉）——30年当たりに換算した場合、4～5棟程度の居住遺跡も見られるようになる（馬場遺跡、出町遺跡、二の畦・横枕遺跡等）。前段階に出現した3棟程度のものと併せ、3～5棟程度のクラスを仮に中規模型遺跡と呼んだとき、Ⅱ～Ⅳ期はこのタイプが顕在化し始めた段階だと位置付けられる。

この時期で注目されるのは、それまでとは隔絶した規模の居住遺跡が突然現れた点である。それは守山市服部遺跡で、30年当たりに換算すると20棟近くの値が算出されている。このように数十棟クラスのものを大規模型遺跡と仮に呼んだとき、Ⅳ期はそれが顕在化した段階と言える。

ただし、この服部遺跡のあり方は異様とも言える。服部遺跡のデータを除くと、図8・10ともに自然な増加傾向がそこに観察できるので、この遺跡のあり方は、突発的・突出的な存在だと位置付けられよう。

- ・Ⅴ期（弥生時代後期）——現在のところ、大規模型遺跡が見出せないが、それを除くとⅣ期に類似した傾向を示す。
- ・Ⅵ期（古墳時代前期）——中規模型遺跡が数的に普遍化した。また、斗西遺跡や桜内遺跡のように、大規模型遺跡が再び顕在化した。これらをもって、居住集団の規模拡大傾向がより強まったことを指摘し得る。

以上のように琵琶湖周辺では、Ⅰ期までは小規模型遺跡にほぼ限られるが、Ⅱ・Ⅲ期中規模型遺跡が顕在化し、Ⅳ期には大規模型遺跡が現れ、Ⅵ期以降には中規模型・大規模型の双方がより普遍化していく傾向にあると結論づけられる。

（3）建物の規模の推移

本節では、第2の細分論点を問う。そのために建物規模の度数分布と散布状況の推移を整理する。まず、各時期の度数分布を表4に示す。観察の結果は以下のとおりである。

- ・8期（縄文時代中期中葉）以前——15㎡を越える建物は見られない。参考までに関西地方の縄文時代に関する類似の先行研究を図11（瀬口2002）に示すと、同様な傾向が見て取れ、これが当該期の一般的傾向だと位置付けられる。
- ・9期（縄文時代中期後葉）——最初の顕著な画期が見出せる。前段階までの上限は15㎡だが、この段階にその限界を超え、度数分布は39㎡程度まで広がる。15㎡以下の小規模な建物に加え、より大きな建物の使用も加わり始めたことが読み取れる。同様な傾向は図11でも看取できる。
- ・14期・Ⅰ期（縄文時代晩期後半・弥生時代前期）——前段階と同様な傾向を示すが、60㎡を越える建物もまれに出現し、Ⅳ期以降の萌芽の傾向が見て取れる（礎遺跡SB02 60.78㎡、北仰西海道遺跡SB1 78.50㎡）。
- ・Ⅳ期（弥生時代中期後半）——第2の顕著な画期が見出せる。前段階までの上限は原則39㎡前後だが、それを越える規模も普遍化し、更に100㎡級の建物も顕在化した（Ⅳ期：吉身西遺跡SH1 132.67㎡、Ⅴ期：御倉遺跡SH01 100㎡、SH02 144㎡、Ⅵ期：柳遺跡第1次調査SH01 110㎡、高野遺跡SH1 112.36㎡など）。

以上、各時期の建物規模の度数分布を示した。次に提示の方法をやや変え、各時期の建物規模の散布状況を図12と図13に示し、分析を試みたい。このうち図12は竪穴建物の傾向で、図13はそれ以外の建物（掘立柱建物・平地式建物）の傾向である。両図を比較したとき、整理すべきポイントが少なくとも2点見出せる。第1のポイントとそれが

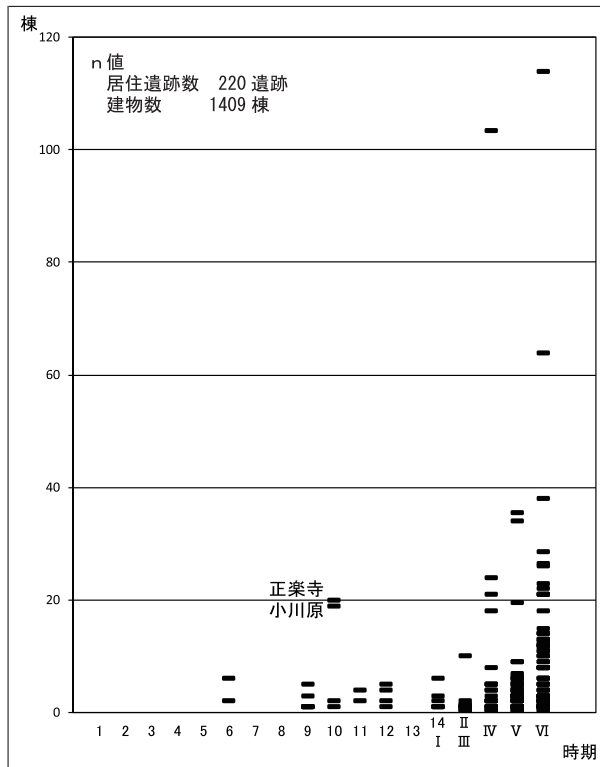


図7 居住遺跡の規模の推移
【建物数：補正前】

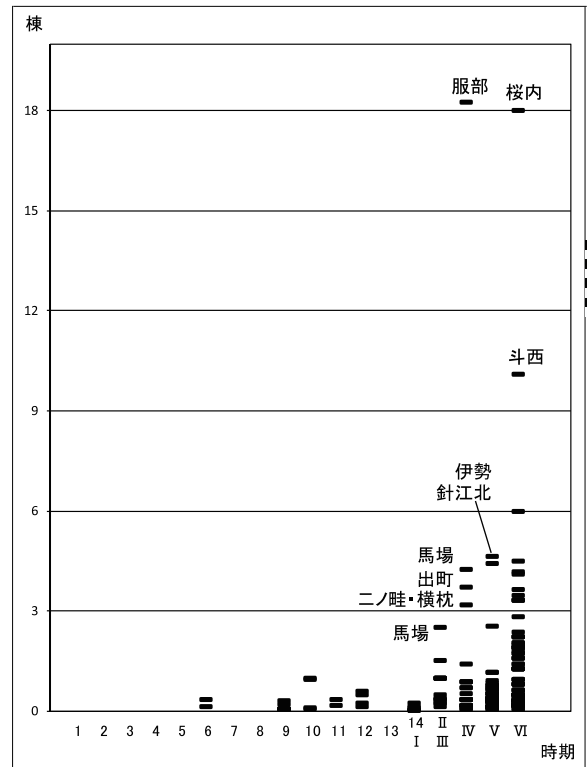


図8 居住遺跡の規模の推移
【建物数：補正後】

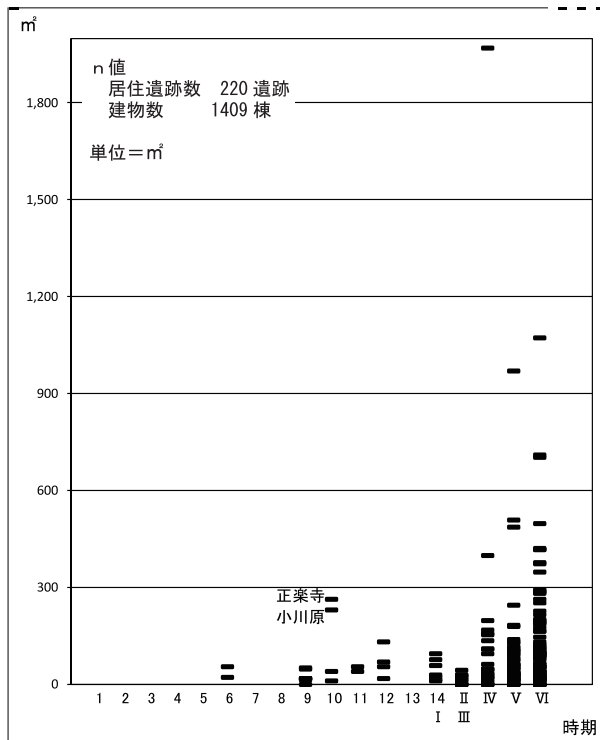


図9 居住遺跡の規模の推移
【面積合計：補正前】

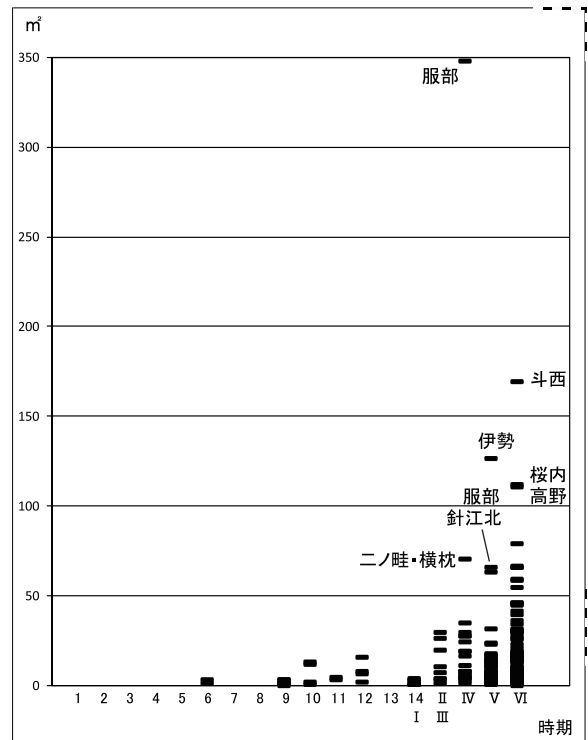


図10 居住遺跡の規模の推移
【面積合計：補正後】

表 4 建物面積の度数分布

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14・I	II・III	IV	V	VI
～3 m ²																0.5	0.5	0.6
～6 m ²									8.3	6.8					15.8	5.4	2.5	2.7
～9 m ²					37.5				8.3	25.0				11.1	21.1	8.6	2.5	5.2
～12 m ²					62.5				25.0	25.0	16.7	9.1		5.6	5.3	9.7	6.1	7.6
～15 m ²			100.0						8.3	13.6	33.3	18.2		22.2	15.8	11.3	6.6	11.6
～18 m ²									33.3	9.1	16.7	9.1		5.6		7.5	8.1	10.7
～21 m ²									8.3	9.1	33.3	18.2		16.7	15.8	9.7	6.1	8.7
～24 m ²									8.3	2.3						10.8	3.6	7.4
～27 m ²												9.1		5.6	5.3	5.9	9.1	8.9
～30 m ²										4.5		9.1		16.7		3.8	6.6	7.8
～33 m ²										0.0		18.2				2.7	7.1	6.4
～36 m ²										2.3				5.6		2.7	9.1	6.2
～39 m ²										2.3		9.1		0.0		3.8	3.6	2.1
～42 m ²														5.6	10.5	2.2	2.0	2.5
～45 m ²																3.8	4.6	1.7
～48 m ²																3.2	4.6	1.2
～51 m ²																1.6	4.6	3.3
～54 m ²																1.6	3.6	1.2
～57 m ²																1.1	2.5	1.0
～60 m ²																0.0	1.5	0.2
～63 m ²														5.6		0.5	0.5	0.2
～66 m ²																1.6		0.8
～69 m ²																	0.5	
～72 m ²																		
～75 m ²																	1.0	0.6
～78 m ²																	0.5	
～81 m ²															10.5	0.5	0.5	0.8
～84 m ²																		0.4
～87 m ²																0.5	0.5	
～90 m ²																	0.5	
～93 m ²																		
～96 m ²																0.5		
～99 m ²																		
～102 m ²																	0.5	
以上																0.5	0.5	0.4
計(%)			100			100			100	100	100	100		100	100	100	100	100
n			1			8			12	44	6	11		18	19	186	197	516

面積の階級 (m ²)	草創期 0	早期 前 1 中 2 後 3	前期 前 4 中 5 後 6	中期 前 7 中 8 後 9	後期 前 10 中 11 後 12	晩期 前 13 後 14	計
～ 3.0							1
～ 6.0		6	6				3
～ 9.0		18	9				4
～ 12.0	1	13	1				5
～ 15.0	1	5					1
～ 18.0		2					1
～ 21.0		1					3
～ 24.0	1						1
～ 27.0							8
～ 30.0	1						4
～ 33.0							1
～ 36.0							1
～ 39.0		1					3
～ 42.0							1
～ 45.0							2
～ 48.0							2
～ 51.0							1
51.1以上							5
検出件数	4	45	16	5	3	11	12
検出遺跡数	1	7	3	2	2	5	5
平均面積	19.2	9.9	6.3	12.3	10.0	8.8	12.7
							15.9
							18.0
							16.1
							27.2
							19.1
							13.2
							26.7
							340
							12

凡例： 各階級の上段の数字は件数、下段は%を示す。 □・■≒5%で、■は当該時期の最多頻度（モード）を示す。

図 11 建物面積の度数分布（関西地方／縄文時代：瀬口 2002）

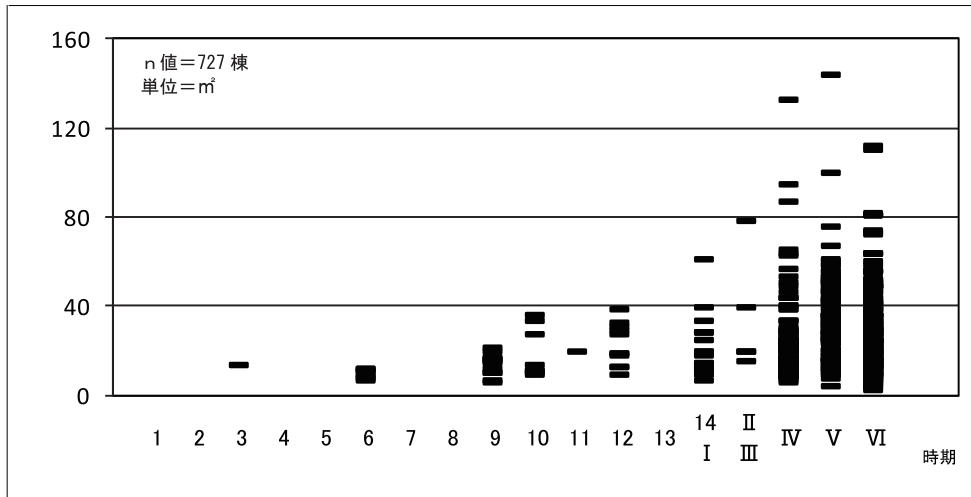


図 12 建物規模の推移【竪穴建物】

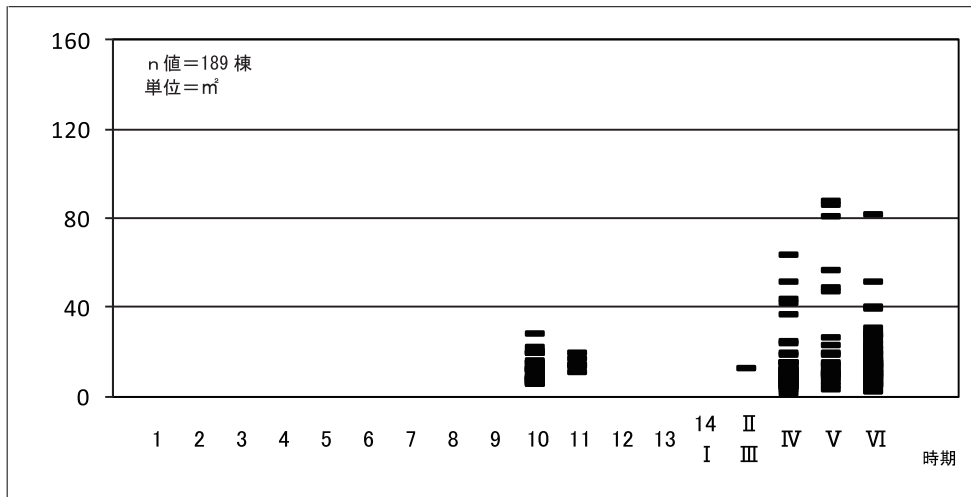


図 13 建物規模の推移【竪穴建物以外】

表 5 成果の総括 凡例：□＝増加・拡大期 ■＝顕著な増加・拡大期

	地域社会の規模		居住集団の規模	
	居住遺跡数 図4	建物数・面積合計 図5・6	居住遺跡規模 図8・10	建物規模 図11・13・14
1				
2				
3				
4				
5				
6				
7				
8				
9				■
10				□
11				
12				
13				
14・I				
II・III	■		□	
IV	□	■	■	■
V	□		□	□
VI	□	■	■	□

示唆する可能性は以下のとおりである

- ・第1のポイントは、Ⅳ期以降における規模の差異である。前段階までの上限は40㎡程度だが、この段階以降の竪穴建物には40㎡を越える規模の建物がより普遍化している。一方、掘立柱建物等には40㎡を越えるものは比較的少なく、竪穴建物に比べて規模の大きい建物の出現傾向は弱いように見受けられる。この差異については、次の2つの可能性が提示できる。
- ・その1つは、竪穴建物と非竪穴建物で役割や使われ方、技術的制約などに差異がある可能性である。
- ・いま1つは錯覚している可能性である。掘立柱建物等の掘り込みをもたない建物は、竪穴建物と比べて検出しにくい。そのため、上記の差異が顕現しているのかも知れない。岩崎直也はかつて各種既刊報告書等を再検討し、報告書では認識されていない掘立柱建物の存在を指摘した（岩崎1991）。もしその成果の蓋然性が高いならば、40㎡を越える掘立柱建物も多数存在することになり、上述の傾向は見直す必要が生じる。

第2のポイントとそれが示唆する可能性は、以下のとおりである。

- ・第2のポイントは、掘立柱建物・平地式建物の出現時期である。今回の分析は、これまでに刊行された報告書の記載データに基づいているが、その限りにおいて、非竪穴系の建物は10期（縄文時代後期前葉）に出現するものの、12期～Ⅲ期（縄文時代後期後葉～弥生時代中期前半）にはほとんど出現せず、Ⅳ期に再び突発的に顕在化するように見える。この第2のポイントについても、2つの可能性が指摘できるだろう。
- ・その1つは、12期～Ⅲ期（縄文時代後期後葉～弥生時代中期前半）に掘立柱建物を利用するあり方が断絶し、その前後で系譜を異にしていた可能性である。
- ・いま1つは、やはり掘立柱建物等の検出しにくいことに起因する錯覚の可能性である。報告書を用いた岩崎直也の建物の再検出作業では12期～Ⅲ期の掘立柱建物も見出されている（岩崎1991）。もし岩崎の再検出の成果に蓋然性があるならば、上述の傾向は錯覚だと位置付けることになる。

以上の可能性を突き詰めるには、岩崎の成果に対する検証に加え、岩崎と同様な作業をその後の公表資料に対しても進めていく必要がある。また今回のような数量的な分析とは別に、遺跡の中でのコンテクストを踏まえた議論も蓄積していく必要があるだろう。しかし、現状ではそれらの作業をする余力はない。この点も本稿がもつ限界の1つとして認識し、以降の課題としたい。

4. 結論と展望

(1) 結論

以上、琵琶湖周辺地域における縄文時代早期～古墳時代

前期の資料を対象として数量的分析を加え、2つの論点を問うた。第1の論点は「地域社会の規模」の推移であり、第2の論点は「居住集団の規模」の推移である。以下、2つの論点の検討結果をまとめ、課題を整理した上で稿を閉じたい。

2つの論点に関する分析結果の総括は、表5のとおりである。このうち、「地域社会の規模」に関するアプローチと成果は次のとおりだった。

- ・第1の論点は、遺跡数・居住遺跡数と建物数・建物面積計値からアプローチした。
- ・遺跡数・居住遺跡数は、Ⅱ・Ⅲ期（弥生時代中期前半）に顕著な画期を迎えて増加する。居住遺跡数を重視するならば、以降はほぼ同一の率で増加し続け、古墳時代前期まで一貫して増加する。
- ・この2つの数値に比べ、建物数と建物面積計値の増加期はやや遅れ、Ⅳ期（弥生時代中期後半）とⅥ期（古墳時代前期）に爆発的に増加する。
- ・建物数と建物面積計値が居住人数の推移を示唆すると見なすならば、琵琶湖周辺地域の社会規模は、Ⅱ・Ⅲ期に居住地が拡散する形でまず増加した後、Ⅳ期とⅥ期に居住者数が顕著に増加する形で拡大したと推察される。
- ・ただし上記の推察は、検出されにくい掘立柱建物の評価によって見直す必要もあり、その検討が今後の課題として残る。

第2の論点である「居住集団の規模」に関するアプローチの方法と成果は以下のとおりである。

- ・第2の論点は、居住遺跡における建物数・建物面積合計値の推移、ならびに建物面積の度数分布・散布状況からアプローチした。
- ・居住遺跡における建物数・建物面積合計値の分析では、Ⅱ・Ⅲ期（弥生時代中期前半）に拡大傾向の萌芽が見出せる。続くⅣ期を境として、中規模型の遺跡が増加していく傾向が見られ、Ⅵ期には中規模型・大規模型の遺跡がそれぞれより普遍化した。
- ・一方、建物面積の分析では、9期（縄文時代中期後葉）とⅣ期に画期が見出せた。これらの時期を境に、より規模の大きい建物が出現する傾向が見て取れる。
- ・建物数・建物面積合計値を居住遺跡の規模とし、建物面積の大小が1つの世帯の規模をある程度示唆すると見なすならば、琵琶湖周辺地域の居住集団の規模拡大傾向は、まず縄文時代中期後葉の9期に世帯の規模が拡大する形で萌芽したことが読み取れる。そして、Ⅱ・Ⅲ期に居住遺跡の規模がやや拡大した後、Ⅳ期以降に居住遺跡と世帯の規模の双方を更に拡大させる形で展開したと結論づけられる。

(2) 展望と課題

今後の展望と課題としては、以下の諸点を挙げる。

第1点は、先学が蓄積してきたこれまでの成果と今回の数量的な分析結果を建設的に照らし合わせ、新たな問いを整理し、生産的な議論を蓄積していくことである。具体的には、稿末付表1に示した先行研究との比較検討等が挙げられるだろう。その中でも例えばV期やVI期における集落や遺跡群の解体、集落規模の縮小傾向（横井川2000・伴野2000ほか）については、先学諸氏の見解を尊重しつつ、詳細に分析を進めたい。

第2点は、今後必ず問題となるであろう掘立柱建物の扱いである。本稿では2つの論点を問うたが、そのいずれでも掘立柱建物の扱いによって、結論は大きく異なる。本論で示した幾つかの作業——報告書等を用いた掘立柱建物の再検出、資料化と集計、遺跡におけるコンテクストを踏まえた位置付け等——は、問題解決において不可避の課題となる。

第3点は将来的な課題であるが、他地域との比較作業を挙げたい。東日本や北部九州でも同様な作業を進め、相互比較することで、地域の歴史的特性とその多様性が改めて客観視できるだろう。今回は、縄文時代の傾向に関しては大きく触れなかったが、比較検討の過程では大きな意味を持つはずである。先史の人々が何を選択し、どのように生き抜いたのか、巨視的な俯瞰作業を改めて試みたい。

ともあれ、今回の作業とそこで派生した課題を踏まえながら、既に多くの成果が蓄積されている生産具や埋葬遺構群等に関する検討も含め、建設的で生産的な議論を更に加えていくことを期し、この稿を閉じる。

謝辞等

執筆にあたっては、近江貝塚研究会の諸氏の助言を頂き、伊庭功・小竹森直子・辻川哲朗の各氏には、資料の提供や建設的なアドバイスを多数頂いた。なお本稿は、現在調査中の守山市吉身西遺跡、甲賀市下川原遺跡の内容をより適正に評価するための作業も大きく兼ねる。また、本稿のデータの一部は、国立歴史民俗博物館が一般公開する「縄文・弥生集落データベース」を、調査・学術研究・教育活動の振興を目的として利用した。この点も改めてここに明記する。

註

(1) 1人の占有面積が対象時期を通じてほぼ変わらないと仮にした場合、住居面積が示す諸々の数値は、人口や居住人数の数的規模をある程度反映するものと考えられ、有効な指標になると考えるが、1人の専有面積は様々な要因で変化するし、所有物の量等によって変動するという限界も併せ持つ。ここではその限

界に留意しつつ、目安の指標としての有効性を便宜的に優先させて用いることにしたい。

- (2) 後述するように集成作業過程の基盤となるソースが、縄文時代と弥生時代以降で異なるために、算用数字とローマ数字が混在している。本来はより体系的に呼称していくべきだが、現状では大きな支障はないので、表1のとおりで作業を進める。
- (3) 藤尾慎一郎が編集した『国立歴史民俗博物館研究報告第149集』とその関連プロジェクトの成果を基盤とする（藤尾編2009）。データ自体は、滋賀県の集成を担当した伊庭功氏から提供を受けた。ここに感謝の意を明記します。
- (4) 同一遺跡でも複数時期にわたって継続する場合は時期ごとにカウントしている。例えばA遺跡で3つの時期区分にわたって資料が見られる場合は3遺跡として集計した。

文献（著者名・刊行機関名50音順、刊行年順）

- 岩崎直也（1991）「弥生時代の建物」『弥生時代の掘立柱建物』埋蔵文化財研究会、79～116頁
- 植田文雄（2000）「近江・湖東地域の弥生集落」『みずほ』第33号、大和弥生文化の会、76～89頁
- 大木要（2007）「滋賀県における弥生時代建物の使用状況について」『王権と武器と信仰』同成社 194～205頁
- 小島孝修（1999・2000・2002）「近江における縄文社会の展開過程に関する覚書」2・4・6『紀要』11・12・14、財団法人滋賀県文化財保護協会
- 小林謙一（2004）『縄文社会研究の新視点』六一書房
- 小林謙一（2008）『縄文時代の歴年代』『歴史のものさし』（縄文時代の考古学2）同成社、257～269頁
- 小林達雄編（2008）『総覧縄文土器』アムプロモーション
- 小山修三（1984）『縄文時代』中公新書
- 近藤広（2002）「近江における弥生中・後期集落の構造」『究班』Ⅱ、埋蔵文化財研究会、181～188頁
- 近藤広（2007）「弥生時代の区画施設を有する集落」『淡海文化財論叢』第2輯 淡海文化財論叢刊行会 17～22頁
- 瀬口眞司（1999～2001）「近江における縄文社会の展開過程に関する覚書」1・3・5『紀要』11～13、財団法人滋賀県文化財保護協会
- 瀬口眞司（2002）「住まいの移ろい」『往還する考古学』1、近江貝塚研究会、71～80頁
- 瀬口眞司（2009）『縄文集落の考古学 西日本における定住集落の成立と展開』昭和堂
- 伴野幸一（2000）「湖南地域における弥生集落の動向」『みずほ』第33号、大和弥生文化の会、60～75頁
- 藤尾慎一郎編（2009）『縄文・弥生集落遺跡の集成的研究』（国立歴史民俗博物館研究報告第149集）
- 松室孝樹（2000）「近江・湖北地域における弥生時代集落の様相—中期から後期を中心に—」『みずほ』第33号、大和弥生文化の会、90～104頁
- 横井川博之（2000）「湖西地域における弥生集落の様相」『みずほ』第33号、大和弥生文化の会、46～59頁

付表1 琵琶湖周辺地域における先行研究事例の概要

時期	杉本源造(1989)	横井川博之(2000):湖西地域	伴野幸一(2000):湖南地域	植田文雄(2000):湖東地域 松室孝樹(2000):湖北地域
I	中段階には弥生文化は定着。平野部でかなりの高い確率で縄文遺跡と重複する。長原式併行期には既に水田農耕を知っており、その頃には水田適地に縄文人と弥生人が共存し、弥生文化成立の前提基盤が確立。湖北地域のある方から見て、伊勢湾地域からの流入も考えられる。	初期農耕に適した低湿地に居住。縄文晩期と重複する傾向。	氾濫原・三角州の微高地に古墳時代前期まで続く拠点農耕集落成立(服部・八夫・赤野井・烏丸・中沢)。新段階に新規の集落が氾濫原微高地に展開(寺中・霊仙寺・門ヶ町・宮前)。	湖東:縄文晩期の遺跡と重複する傾向。大中の湖南遺跡を核として展開。方形周溝墓出現するが、小型(一辺10mまで)。群構成は2・3基程度。湖北:川崎遺跡で環濠集落形成。
II	湖北の遺跡では、前期から中期への継続性は見えにくく、集落移動が考えられる。 大中の湖技法で知られる玉作りが開始。烏丸崎遺跡で玉作り集団想定可能。服部遺跡の周辺を取り囲む諸遺跡でも玉作りが確認される。	I期と同様な立地傾向。		湖東:内湖に面した広大な低湿地に集落展開。環濠集落も出現(大中の湖南遺跡)。湖北:横山遺跡・塚町遺跡で玉作始まる。
III	湖東では低地から丘陵地に集落が進出し始め、零細の経営の集落の中から拠点集落が誕生する。 遅くともこの段階までに玉作りが本格に開始。ただし、烏丸崎遺跡を除いて零細的で、交易品生産というよりは、地域内への供給を目的としたものと考えられる。	分村化進み、扇状地や段丘、丘陵上へ展開。小規模集落では、住居数棟で構成される。 北仰西街道遺跡で、中央墓道をもつ2列配列の墓群形成。出自に基づく二分原理。外堀を通しての集団関係維持と互酬的構造の再生産に関連するもの。		湖東:上流部の扇状地や河岸段丘にも集落拡散。1～2つの単位集団が、生産と消費を自己完結させる領域を各河川の大小様々な沖積地に展開。宮ノ前遺跡で環濠集落形成。
IV	集落の分村による内陸部への進出が進む。高地性集落が比叡山東麓で顕在化。湖南では下之郷遺跡などの環濠集落出現。 服部遺跡では方形周溝墓群で特定の家族のための墓域が現れる。南群では大規模な方形周溝墓を中心に10数基の墓群が顕在化。北群にも大規模個体はあるが300基以上の中に埋没し、特定家族の抽出困難。	規模拡大の画期。大規模集落化。鉄器化との関係想定される。 円形・方形住居が混在。熊野本遺跡では円形:大型・中型、方形:中型・小型の使い分け。 高地性集落顕在化。①湖南の環濠集落と対応して展開した軍事通信関係の施設群、②湖南の玉作と対応する情報収集、物資輸送路の確保を目的とした監視施設、③鉄などの流通に関連する、地域間・地域内の流通掌握・分配システムに関連する施設などの可能性。 弘川B遺跡・高田館遺跡で墳丘墓顕在化。溝を共有しない単独型で、規模から見ても独立的。有力首長層の成長想定可能。	扇状地に集落拡散。環濠集落が形成されるが、継続性は低く、短期間で移動する(下之郷・播磨田東・二ノ畦・山田町・下鉤)。特殊な歴史的背景や役割が想定される。 古・中段階の下之郷では武器・防具が多量に出土。中・新段階の播磨田東では石器に加え、砥石が増加。新段階の二ノ畦では石器は消滅し、砥石・鉄製品が増加。 方形周溝墓の群構造に変化。中央墓道を挟んで2列配列。 東海・近畿各地・瀬戸内などの土器が出土し、地域間交流の痕跡見える。	湖東:Ⅲ期末頃から方形周溝墓群の規模拡大(10～20基を越える)。市子遺跡では一辺が20mと大型化し、墓道にも計画性が顕在化する。方形周溝墓の絶対数も増加する。 このⅢ期末からⅣ期を画期として、人口増や技術的進展などの社会的動態を生む諸条件が整う。
V	近江全体で遺跡数がいっそう増加する。前半期は依然として中核集落が継続(服部・鴨田・針江等)。湖岸周辺の低湿地の生産地の飽和状態と人口増加を要因として、中期末を画期として、下流域から内陸河川沿いへ分村化が進む。 後半期は湖岸集落が衰え始め、分村先の内陸部集落が力を蓄え始める。比叡山東麓の高地性集落も再び出現する。 銅鐸の出土が南部に集中することから、湖南地域が近江全体を統合し得る勢力になっていた可能性がある。	環状集落盛期。集落の中心に柵で区画された特殊な建物出現。ただし、Ⅵ期以降のように他の建物群からは独立していない。 Ⅴ期末に遺跡群解体。集落規模の縮小傾向現れる。 針江北・川北遺跡で木棺墓群。グループ間に格差見えない。家族墓的位置付け。南市東遺跡でも均質的な方形周溝墓。 熊野本遺跡で貼石持墳丘墓。古墳時代に繋がる様相。	扇状地に大規模集落発達(伊勢)。伊勢では中央部に大型建物11棟検出。政治・祭祀の中心か。独立棟持付大型建物顕在化。下鉤は金属生産、下長は水運といった役割分担顕在化。環濠は全周しなくなるが、柵や溝で集落内を区画。 Ⅳ期末からⅤ期初頭に、二ノ畦などの大規模集落解体。小規模分散への時代へ移行。	湖東:中沢・斗西・石田・出町遺跡で環濠集落形成。石田遺跡ではフイゴ羽口や銅鋳が出土する。 方形周溝墓が大型化し、辺の中央部に陸橋持つものが出現。前方後方墳の萌芽形も顕在化(田中1996・1997)。 浅小井遺跡の前方後方墳は、中期の土坑墓群を切って単独で構築され、新たな階層社会の成立を顕現するモニュメントと考えられる。 新段階に東海地方との結びつきが濃厚となり、前方後方墳の出現や土器様式などの変容生む。 湖北:Ⅴ期前半に環境変動に伴い、集落移動などの可能性。 五村遺跡・西円寺遺跡で円形周溝墓出現。鴨田遺跡で前方後円形の周溝墓形成。
VI	前期以来の集落の多くはこの時期に解体・縮小・移動。新規集落が新たな拠点集落になる。集落の解体・分散傾向が進み、基礎地域内で集落群の再編始まる。 方形周溝墓群内に前方後方形の周溝墓が忽然と現れる。集団と不分離のものほかに、集団から独立したのもも確認される(富波)。			湖北:扇状地扇状部に遺跡集中。鉄製農耕具の普及による耕地開発か。

ANNUAL BULLETIN
of
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritage
Vol.28 2015.3

私たちは文化財をととして
ゆたかな滋賀づくりに貢献します。



公益財団法人滋賀県文化財保護協会
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritages